

加齢に対する信念の構成要素の検討

坂口 奈緒

本研究では自分自身の加齢の捉え方を「加齢に対する信念」と定義し、中年期における加齢に対する信念の構成概念を明らかにするため、その構成要素を探索的に検討することを目的とした。さらに、加齢に対する信念の構成要素を性別、年齢別に把握し、それぞれの特徴を検討した。

先行研究から加齢に対する信念として想定され得る記述を収集し、これらの記述内容をポジティブ、ネガティブ、どちらでもないニュートラルに分けた。そして、これらの対となる記述を作成した。先行研究から得た記述及び作成した対となる記述を混ぜ、これらを 2 つの質問紙に分け、それぞれの質問紙を用いて調査(それぞれ調査 1, 調査 2 とする)を実施した。参加者には年を取った時の自分自身の状態を想像し回答を求めた。

まず、全項目間の相関係数を算出した結果、中年期には自分自身の加齢を健康及び社会・心理の 2 側面から捉えていることが両調査から明らかになった。次に、各調査において項目を健康及び社会・心理の 2 側面に分け、主成分分析を行った。その結果、2 つの調査で得た健康、社会・心理の第 1 主成分はそれぞれの総合評価となる主成分であり、【健康総合評価】、【社会・心理総合評価】とした。第 2 主成分以下は各側面の評価軸となり、これらを加齢に対する信念の構成要素とした。健康面では、両調査共通の構成要素を 1 つ得、健康を気分の良さもしくは身体的強さで捉える【気分または身体】を得た。社会・心理面では、両調査共通の 1 つの構成要素と一方の調査のみから得た構成要素があった。両調査から、人生及び未来の評価の観点から加齢を捉える【人生評価または VOL】を得た。また、調査 1 から、人との交流または趣味の取り組みに関する【自由時間の取り組み】、ソーシャルサポートの有無に関する【ソーシャルサポート】を得た。一方で、調査 2 から、対人関係の良好さに関する【対人関係】、サポートの享受または能力の維持・向上を重視する【孤高】、環境の良さもしくはソーシャルサポートの享受を重視する【環境またはソーシャルサポート】を得た。

これらの主成分別に主成分得点を算出し、性別×年代(40, 50, 60 代)の被験者間 2 要因分散分析を行った。その結果、両調査共通の【健康総合評価】、【社会・心理総合評価】、【気分または身体】、【人生評価と VOL】の主成分得点について、両調査で結果が一致しなかった。調査 2 のみで【健康総合評価】、【社会・心理総合評価】の年代の主効果が有意であった($p < .05$; $p < .01$)。また、【気分または身体】、【人生評価と VOL】で有意な交互作用がみられたため、単純主効果の検定を行った。その結果、両者ともに 60 代における性別の単純主効果、男性における年代の単純主効果が有意であった($p < .05$; $p < .05$; $p < .05$; $p < .05$)。調査 1 のみでみられた主成分の主成分得点について、【自由時間の取り組み】では性別の主効果、【ソーシャルサポート】では性別及び年代の主効果が有意であった($p < .05$; $p < .05$)。一方で、調査 2 のみでみられた主成分の主成分得点について、【対人関係】の年代の主効果が有意であり($p < .05$)、【孤高】の性別及び年代の主効果が有意であった($p < .01$; $p < .001$)。

両調査で共通した点は、加齢に対する信念が健康、社会・心理の 2 側面分かれること、【気分または身体】、【人生評価と VOL】は共通の構成要素として抽出された点である。今後一方の調査のみで抽出された構成要素に関しては、性別や年代における違い及び項目内容の精査をすすめ、再検討する必要がある。(臨床死生学・老年行動学)